



松澤 伸介

社団法人東北経済連合会 副会長

「一番じや駄目なんです。」

二年半前、華々しく誕生した民主党政権。その目玉の一つとして始まったのが「事業仕分け」だった。成果の程はよく分からないが、科学技術分野への予算を巡って発せられたあの言葉。そう、「世界一でなければいけないんですか。二番じゃ駄目なんですか」。流行語にもなった。善し悪しは別として、科学技術への財政出動の在り方を考える契機ともなった。

さて、素粒子物理学研究のための世界一の研究施設を北上高地に誘致しよう、という動きが熱を帯びてきた。この施設は、岩盤の強固な北上高地の地下100mに直線で30～50kmに及ぶトンネルを掘り、そこに超精密な巨大加速器を置いて、両側から電子と陽電子を光の速度まで加速し衝突させ、極小空間でビッグバン直後の状態を再現するという、とてつもなくスケールの大きいもの。ILC（国際リニアコライダー）計画だ。

この計画へもつながるビッグニュースが昨年末飛び込んできた。各紙は「ヒッグス粒子、存在か?」と伝えた。ヒッグス粒子は、イギリスの物理学者ヒッグスの名にちなんだ呼び名。遡ること50年前、このヒッグスさんが、「(当時、物質の最小粒子と言われていた)クォークとは別の素粒子があるのでは…そうでないと万物の成り立ちが説明できない」と言いだした。そして、世界の物理学者が研究を重ねることになる。今回の発表は、欧州の最新の研究施設での研究成果(中間報告)だが、「ヒッグス粒子は、やっぱりあるようだ。その確率は現段階では98.9%」と言うのだ。

かねてからヒッグス粒子が発見されると、さらに詳細を探究するためにも、必ずILCが必要となると聞いていた。そして、本年中には、正式に「ヒッグス発見」の発表があるだろうとも言われている。いよいよ ILC の出番だ。

いま、世界の産業界は「より小さく」を目指し競っている。より小さいものをコントロールする技術が性能やエコ度で優位性を保てるからだ。

北上高地に ILC が造られることになれば、世界一の研究施設めがけて、世界中から優秀な頭脳が集まってくる。その数、3,000人とも言われる。その家族は勿論、建設や機材、メンテ関係者などを合わせると、1万人もが研究施設周辺に移り住むことになる。まさに「国際科学都市」が生まれる。そして、その微粒子を解明する先端技術を求めて産業も集積していく。そこから人間社会に役立つ多くの発見・発明が生まれ「東北発」のとてつもない技術革新、イノベーションが創生されていく。

それ故に皆、世界一をめざす。造るなら「世界一でなければいけない」のである。

(東星興業株式会社 監査役・まつざわ しんすけ)